

## NEWS

# 開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会  
発行日／平成9年8月6日（水）

Number  
57

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100  
印 刷／中川印刷株式会社



第一次大戦勝祝賀提灯行列 大正7年（1918）11月26日

## 企画展



鶴見花月園で人気のあった「大山すすべり」

## 「大正期の横浜 —民衆の時代」

大正期の横浜は、明と暗とが交錯する。明治後期からはじまつた新港埠頭の建設、水道第二次拡張などの都市基盤整備は、大正にはいって完成し、横浜は近代都市として生まれ変わった。第一次大戦ブームに、横浜商人のいくつかは総合商社への歩みを始め、大規模な工場が進出し、まちも活性化した。華やかな都市の娛樂も人気を博した。大正六年（一九一七）には、大正期を象徴する建築として、多目的ホールを有する公会堂としては六大大都市のトップをきり、開港記念横浜会館が竣工した。横浜の都市としての光彩はこの時期

今回の企画展示「大正期の横浜—民衆の時代」は、このような大正期に生きた横浜の人びとの歴史を、関東大震災までを中心紹介するものである。時代全体を象徴的に示す資料は乏しい。多様な時代の断面を集め、大正期の横浜の時代相を描くことが

にもっとも強く放たれたといつてよいだろう。しかしながら、大正九年の恐慌により経済的な打撃を受けた横浜は、同二年の関東大震災で壊滅する。労働者は恐慌を契機に階級色を強めて大規模な争議をおこし、失業者や生活不安の者たちは、さまざま公的扶助にむかうこととなる。廃墟となつた横浜は慢性的な不況のなかで長い長い復興の過程を歩む。この明と暗のふたつの時代は、まったくの明と暗に区分されるものではない。大戦ブームは多くの富める者を生み出す一方、工業化の進展による労働者の増大もたらした。労働者は物価騰貴に、生活難が深刻となる。長期化しなかつたが横浜でも米騒動が発生し、恐慌以前にも一定の社会政策の導入がみられ、労働者の組織化も準備されたのである。しかしながら労働者が、明治期にあつた「都市下層的」貧窮の状態にいたわけではない。労働者の生活における余暇の大切さが論じられ、娯楽の場も多様化している。生活の不安をかえながらも、今日的な表現としての「民度」は上昇しているとおもわれるるのである。

今展示の手法となる。（平野正裕）

# 「大正期の横浜—民衆の時代」

## 第一次大戦戦勝祝賀行列

ヨーロッパ戦線でドイツが降伏して第一次大戦が終結するのは、大正七年（一九一八）一一月である。日本の軍事行動は大戦が勃発した大正三年のうちに終了していたが、連合国の一員として大戦勝祝賀行事が全国各地で催された。横浜は二六日の提灯行列・二七日の連合国人の仮装行列で祝った。ときに大戦ブルーで「成金」が統出した時代である。行列のために横浜市が作成した提灯一万個、港橋には祝賀アーチが設けられ、弁天通の原名会社では「BANZAI」の大額が掲げられた。

横浜市役所、開港記念横浜会館、横浜正金銀行はライトアップされた。仮装行列も、東京の祝賀行事を視察した某外国人の言では「当日の横浜の装飾行列は東京よりも遙に上手で恐らく全国中第一の盛観だらう」（横浜貿易新報、以下おなじ）と予測される盛大なものであった。提灯行列は二六日夜、市役所前から出発し、弁天通・馬車道・吉田橋・吉田町・桜木町駅・本町通・神奈川県庁・大桟橋・海岸通を行進するもので、参加者一万九千人と伝えている。

仮装行列は二七日朝に花園橋際の横浜公園を出発し、市役所・港橋・蓬莱町・長者町・伊勢佐木町・馬車道・本町通・日本大通・本町通・堀川・海岸通・大桟橋（折り返し）・海岸通・水町通の順で行進した。沿

道には多数の市民が行進を迎えた。

横浜港には軍艦が入港し、複葉機が空中から連合国旗を降らせて祝典を盛り上げた。

ここで紹介する資料は、この提灯行列と仮装行列の写真である。当館所蔵の写真帖には六三枚の写真がある。横浜公園を会場とした盛大な遊会、有吉忠一知事を中心とする開港記念横浜会館でのレセプション、ライトアップされた市役所・横浜会館・正金銀行が写されている。提灯行列の写真は夜間のためか一枚しか残っていない（前頁表紙）。ほとんどは花車を中心とした仮装行列の写真である。

日本は、天の岩戸（天照大神）の花車を先頭に、宝船（真田組合）や忠臣蔵四十七士（クーパー商会）などの仮装で行進した。イギリスの汽船、インドの象など、その国独特的の花車が登場している。第一次大戦戦勝祝賀行列は大戦ブルームにわく横浜のイベントとして、実際にぎやかなさまを伝えている。

**富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場・歌劇記念絵はがき**

静岡県小山で紡績事業をはじめた富士紡績株式会社が、経営不振においていた日本紡績株式会社を買収したのは、明治三六年（一九〇三）八月である。日本紡績は保土ヶ谷に工場をもち、買収後この工場は富士紡績保土ヶ谷工場として再出発する。日本紡績は、生糸にひくことのできる。

富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場は、大正九年（一九二〇）五月の富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場の調査の付属資料として収集されたものである（法政大学大原社会問題研究所所蔵）。本資料は江刺昭子氏「富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場女工の労働状態」『郷土神奈川』三三号、一九九四年で紹介され、本文は内容を抽出して、『社会政策時報』大正一〇年八月号に掲載されている。

処女会とは女子青年会と言いかえてよい。保土ヶ谷工場処女会は、全国初の工場処女会として、寄宿工女を構成員として大正九年（一九二〇）

ない脣繭から糸を紡ぐ「綿糸紡績」工場であり、富士紡績保土ヶ谷工場となってからは同社の綿糸紡績部門の主力をになってゆく。富士紡は明治三九年（一九〇七）に東京瓦斯紡績と合併して富士瓦斯紡績と名称を変更。保土ヶ谷工場は、富士瓦斯紡績の綿紡織布「富士綱」の成功により飛躍的に発展し、恐慌前には六千人の、恐慌後では四千人の、県下最大の労働者をようする工場となる。

さて、ここに示す絵はがきは、大正九年（一九二〇）に作成された同工場処女会の歌劇記念絵はがきである。大正八年労資協調をすすめる目的で団法人協調会が設立され、その調査活動のひとつとして工場別の労働事情調査をおこなった。この絵はがきは一〇年の五月の富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場の調査の付属資料として収集されたものである（法政大学大原社会問題研究所所蔵）。本資料は江刺昭子氏「富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場女工の労働状態」『郷土神奈川』三三号、一九九四年で紹介され、本文は内容を抽出して、『社会政策時報』大正一〇年八月号に掲載されている。

「不思議の森」は、故郷を離れた少女の物語である。少女は、ふとしたことから悲しみにうちひがれる。「さびしきはわが身の上よ朝夕に／おもかげうかぶ『き母上の』と、身寄りのない自分を悲しみ、悲



「天の岩戸」をかたどった花車 大正7年（1918）11月27日

しみを忘れるかのように夢を見る。

私はどこかの王様の血をつたへて

うけたる尊き姫よ／今日にも家来が

むかへにくれば大きなお城のきれい

なへやに住む身となるの／そうなり

やかあさまおむかへします」。しか

し現実はなお少女を打ちのめす。と

ころがそこに女神が登場する。「わ

れは女神、なやむものを助ける／正

しきもの救はるべし／清きものは幸

あり」。このことばに力をえた少女

は、自らのつとめに励む。「はても

なくまはる車まはるたびに orene は

／うつくしききぬのはればれとおれ

て行く」。仕事で得た充実感。「わが

やみ□□□〔不明〕消えてむねは

はれたり／空も晴れぬ、これより家

路さしてかへる／わがよろこびを誰

も知らじ」。家に帰った少女を訪ね

てきたのは、狩りの帰途に少女を見

始めた王様の命を帯びた家来たちで

あった。「みちにあへる清き娘さ

せと仰せのいなみがたく／この家を

たづねてわれら来る」。少女は夢が

現実となり王様のもとにいく、とい

うストーリーである。

保土ヶ谷工場の寄宿工女は、年令  
は一三才から二五才までがほとんど  
で、とくに一四才から一九才の少女  
でしめられている。その出身地は宮  
城・青森・北海道・秋田・福島・新  
潟・高知の七道府県で約九割におよ  
ぶ。いずれも、故郷をあとにした少  
女たちで、学歴もなく、実家に対し  
て少ない賃金から送金をしている者  
たちであった。彼女らは、朝六時か



輸出が好調であった真田組合  
の組合員扮する「七福神」  
大正7年（1918）11月27日

ら夕六時まで（うち休憩一時間）の  
長い労働に従事した。

歌劇は、「清く」「正しく」、仕事  
に励むことを説き、それが幸福への  
道であることを示す。主人公は寄宿

工女の共感を呼ぶ境遇の少女であり、  
幸運のチャンスにめぐまれた美人や

身分の高い者ではない。いわばシン

デレラ・ストーリーであるが、勤勉

さが強調され、まさにそれが幸福へ  
の道であると説く。「女店員募集」

にあっては、「どうも驚くあの志願

者の群／なんにもできずにおしのふ

とさ／どうも驚くあの志願者の群／

口のみ達者にうでのにぶさ／この店

にははいれぬ人よ／この店にはつか  
へぬ人よ」と、対極的な存在を登場

させている。

歌劇は、勤勉であれば幸福になれ

る、という通俗道徳観を、工女自身  
が美しい舞台衣装をまとい、人前で  
演じることで普及させるものであつ  
た。通俗道徳のもっともボピュラー  
な体現者として二宮尊徳がいるが、  
尊徳では若い工女たちの共感を呼べ  
ない。夢をかなえる、幸福な結婚が  
待っているというところに、少女を

陶酔させる要素があった。一方、大

正八年は労働組合が激増し、九年は  
労働運動が激化する社会情勢があっ

た。とくに九年七月には東京府下本

所向島の富士瓦斯紡績押上工場で、  
職業別労働組合である紡織労働組合

の組織を背景として、全国で初めて

労働組合の公認のみを要求する大争

議が発生している。組合関係者や社

会主義者を劇中に「おしのふとい」

「口のみ達者」な者と暗示的に登場さ

れていたと考へられなくもない。処

女会を組織し、このようないい

歌劇を企画することが、當時盛ん

となりつつある労働問題をかくし、  
労資協調をすすめる富士瓦斯紡績の

意図であったことは言うまでもない。

とくに保土ヶ谷工場処女会は「比

較的教養アルモノ約五百五十名ノ組

織セル修養機関」であり、寄宿工女

の四人に一人の割合で選ばれた者た

ちの集まりであった。そのなかで、  
歌劇に出演できる少女は一握りであ

る。歌劇の配役の割振りの基準はわ

からないが、勤務態度が模範的で、  
工場に付属する小学校・補習学校で

優秀な成績をおさめ、処女会活動に

積極的な者、であったろう。会社に

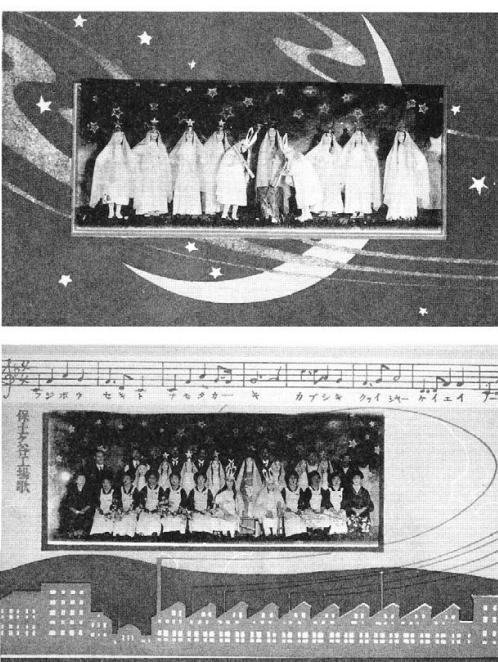
よって二千人のなかから選ばれた

「シンデレラ」たちが、この絵はが

きにおさまっているのである。

それでも自らの姿が絵はがきとなっ  
たときの少女たちの晴れやかさはい  
かばかりであつたろうか。またいつ  
かは自分も歌劇を演じたいと願つた  
少女たちの気持ちは……。歌劇は労

資協調の装置としての機能をもつて  
いたが、つらい日々に夢をあたえ、  
心熱くするきっかけをもたらし、実  
際に演じた少女たちの宝物のような  
絵はがきをとらえたい。そうしな  
くては、民衆史のもつほのかな明る  
みをとらえることはできない。



富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場処女会の歌劇記念絵はがき  
大正9年（1920）法政大学大原社会問題研究所所蔵

## ペリー横浜上陸の地

横浜開港資料館の隣接地、「開港広場」に『日米和親条約調印の地』記念碑がある。嘉永七年三月三日（一八五四年三月三一日）、この地一帯に設けられた「横浜応接所」において幕府とペリー提督との間で条約書（神奈川条約）が取り交わされたことを記念したもので、『開国』の記念碑といつてよい。ペリーは、条約草案を手渡すため二月一〇日（三月八日）横浜初上陸を果たしている。遺憾というべきか、『ペリー横浜上陸の地』記念碑はない。

『ペリー日本遠征記』は横浜初上陸の模様を次のように記す。

「約束の日、〔三月八日〕の午前一時三〇分に、儀仗隊一完全武装の士官、水兵及び海兵隊員約五〇〇人から成るが、ブキヤン中佐の指揮する二七艘の将官用舟艇に乗りこんで、そして横に一列に並んで、見事な隊形を組んで岸に近づいた。儀仗隊が上陸し、整列し終ると、私は儀礼にかなった礼砲の発射を受けながら、私は、私の将官用艇に乗って続いた。上陸すると、私はわが儀仗隊と日本の役人たちの一一行によつて迎えられ、そして会議のために用意された広間へと案内された。」

上陸の様子は、随行の画家ハイネによって記録されている。石版画「ペリー横浜上陸図」である。ハイネは陸側から上陸の模様を描いていいる。ペリー一行は、上陸地より水神木（玉楠の木）左脇にマーキングがなされている。この図面によ

化されてしまっている。拠り所は「玉楠の木」である。

「玉楠の木」は、中区日本大通三番地横浜開港資料館の中庭に現存しているが、当初のままの位置に在るわけではない。横浜開港資料館旧館すなわち英國総領事館の震災復興において、現在地に移植されている。

英國総領事館の建築設計図面の中に、「玉楠の木」の旧位置を示す図面があり、正面玄関ポーチ左脇にマーキングがなされている。この図面によ

れば、北に約一メートル移動されたことになる。

この図面には、幸いことに、震災前の歩道の位置が破線で示されている。この時以降、従来の「海岸通り」とともに、現在の正門の位置は震災前に横浜税関敷地境にある。いい

ことになる。資料館新館地階ドライエリアに設置されている居留地下水道の煉瓦造卵型管の位置が震災前

にあり、文字通り「海岸通り」の自然の波打際が図示されている。

現「元浜通り」は、最も海岸寄りの通りであり、文字通り「海辺通り」であった。慶応一年の「横浜居留地」

改造及競馬場墓地等約書」に基づき整備されたのが現「海岸通り」であり、この時以降、従来の「海岸通り」は「元浜通り」となったのである。クリベの地図では、波止場の突堤間は護岸化されているが、位置は旧来の海岸線と余り変わりなく、護岸の前だしはほとんどなかつたようにならぬ。その位置は震災後の区画整理によって直線化された現「海岸通り」の幅員内に収まるものと判断される。

以上の推察からすると、ペリー横浜初上陸の地は、現「日本通り」と現「海岸通り」の交差点付近、和親条約調印の地は、現「神奈川県庁」本庁舎構内北東隅辺りということになる。本誌第五五号に「横浜ペリー銅像を一未完の銅像建設計画」が発表されている。もしも、ペリーの銅像を建立することがあるとすれば、「日本通り」突当り「開港資料館前」交差点が最も相応しい場所ということになる。

（堀 勇良）

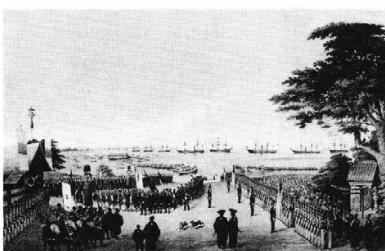


図1 ペリー横浜上陸図

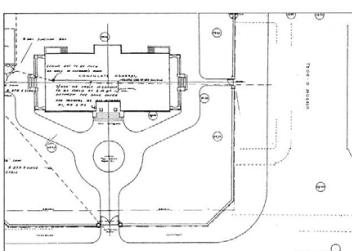


図2 英国総領事館建築設計図面(1930年)

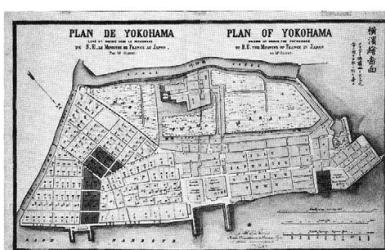


図3 クリベの横浜地図

# 華僑が生んだ横浜のピアノ —李佐衡とT.A.LEE PIANO—



図1 李佐衡肖像  
(李全英氏蔵)

明治の横浜では、写真、印刷、西洋建築など多くの新しい技術が外国人から日本人に伝えられていったが、そうした技術移転の系譜の中に西洋人となるで華僑の人々がいた。その一つピアノ製造について、『開港のひろば』第五号(平成八年一月)で「ピアノ製造と横浜華僑」と題する小文をまとめ、主として周興華樂器店について紹介した。その段階ではもう一つの華僑のピアノ工場、李兄弟ピアノ製作所(以下李ピアノ製作所と略す)については不明な点が多く、ピアノそのものの存在も確認することができなかった。

その後の調査により、今年四月に記事が五月三日の『神奈川新聞』に掲載されると、新聞を読まれた方々からご連絡をいただき、さらにこれがわかった。そしてその紹介と李ピアノ製作所について詳しく紹介する。

李佐衡という人

李佐衡は一八八四年、中国の浙江

東京都西多摩郡檜原村在住の陶芸家萩原基資氏が李ピアノをご所蔵であることがわかった。そしてその紹介などがわかった。そしてその紹介方が数年後に、関東大震災にみまわれ、李佐衡は家族と親戚の周一族ら二四人とともに、大阪商船の湖南丸で大阪に向かい(外務省記録「変災及救済関係雑件関東地方ノ件支那人救済及送還ニ関スル件」第一巻)、その後故郷の鎮海県に避難した。

震災後もなく李佐衡は横浜にもどり工場を開くとともに、復興

にも尽力し、『横浜復興録』(大正一四年)の「横浜市民感謝録」にその

名前が見える。その後事業は順調に

なりやすい、桂か輸入品のラワンを使用した。また、李ピアノのケースには木目を生かしたオールナット、マホガニーと、黒塗り、えんじ塗りの種類があった。えんじ塗りのピアノはおもに中国人が好んだといわれる。またケースには飾り彫りがほどこされる場合もあった。今回発見された三台はいずれもケースの色は黒であるが、装飾がそれぞれ異なつており、一台一台を手づくりで仕上げた李ピアノの仕事ぶりがうかがえる。

こうして製造された製品は直接顧客の元に運ばれていた。顧客はおもに神奈川県下各地の学校やピアノ教師であった。ちなみに昭和二十年

昭和一〇年代の李ピアノ製作所

の写真の所蔵者笛野正司氏は昭和一三年から二〇年まで李ピアノ製作所で働かれた方で、現在も相模原市で

ピアノ調律所を営んでおられる。

笛野氏によれば、当時の李ピアノの作業部門は大きく二つにわかれ、部品の組み立てや調律という内部構造を扱う部門と、ケース・響板・支柱・鍵盤の作製や塗装といった木工

作業を行う部門とにわかれていた。

李佐衡・李民華親子と笛野氏は前者の部門を担当していた。

使用していた部品のうち、鉄骨は宿町にあった加藤鋳造という鋳物工

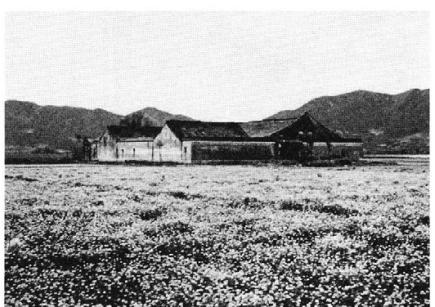


図2 鎮海県の李佐衡邸 (李全英氏蔵)

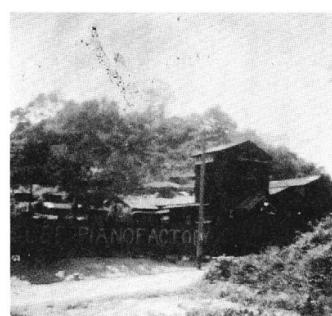


図3 李兄弟ピアノ製作所  
(笛野正司氏蔵)

部品の組み立てや調律という内部構造を扱う部門と、ケース・響板・支柱・鍵盤の作製や塗装といった木工作業を行う部門とにわかれていた。

李佐衡・李民華親子と笛野氏は前者の部門を担当していた。

使用していた部品のうち、鉄骨は宿町にあった加藤鋳造という鋳物工

場に、李ピアノのマークを刻んだ鉄骨を発注していた。アクションについては、昭和一七年ころまではドイツのレンナー社の製品を使用していたが、戦争で輸入部品の入手が困難になると、生麦のアクション専門工場に部品を発注するようになった。響板と鍵盤の材料には、しなやかでくるいがない、えぞ松を使用した。ケースの木材には柔らかで仕事がやりやすい、桂か輸入品のラワンを使用した。また、李ピアノのケースには木目を生かしたオールナット、マホガニーと、黒塗り、えんじ塗りの種類があった。えんじ塗りのピアノはおもに中国人が好んだといわれる。またケースには飾り彫りがほどこされる場合もあった。今回発見された三台はいずれもケースの色は黒であるが、装飾がそれぞれ異なつており、一台一台を手づくりで仕上げた李ピアノの仕事ぶりがうかがえる。

こうして製造された製品は直接顧客の元に運ばれていた。顧客はおもに神奈川県下各地の学校やピアノ教師であった。ちなみに昭和二十年



図7 毛利トモ子氏所蔵李ピアノ

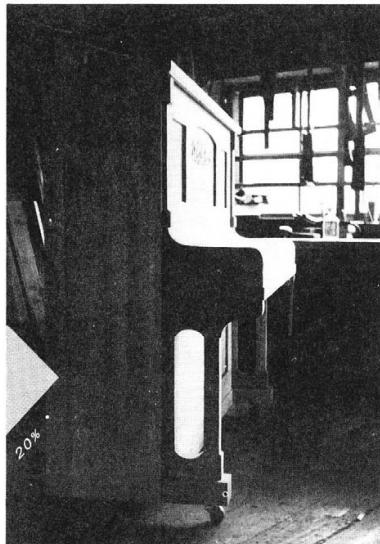


図4 工場内部と製作中のピアノ  
(笹野正司氏蔵)



図5 萩原基資氏所蔵李ピアノ

頃には、神奈川県愛甲郡の半原小学校と高峰小学校に李ピアノが一台ずつあり、 笹野氏が調律にでかけたそ うである。

昭和一八年頃になると、部品の輸 入や資材の調達が一層むずかしくなっ た。李佐衡はそうした状況でも製造 を続けるため、苦労して木材や部品 を買い集め敷地内に保管しておいたところ、昭和二〇年四月一五日の空 襲となり、資財も工場は焼失 してしまった。工場を失った李一家 の多くはまもなく故郷へともどって いった。しかし長男の李民華・李全 英夫妻はピアノ製造業を再興するこ とはままならなかつたが、横浜にと どまり、故郷に帰つた一族の生活を 支えた。

### 現存する李ピアノ

今回三台の李ピアノの存在が確認されたが、それらは李ピアノ製作所の全盛期、昭和初期に製造されたものと考えられる。

まず萩原基資氏ご所蔵の李ピアノ

クがついており、当時の李ピアノは ドイツから輸入した部品を使用して いたことがわかる。萩原家では除湿 装置をピアノにとりつけていたため、 保存状態が良く、調律ピン、弦、ア クション、ハンマーなどすべての部 品が元のままであった。ケースは、 桜の板に黒の漆をぬつたもので、年 月を経ても板のそりがなく、板材を 十分に乾燥させるなど、当時の丁寧 な仕事ぶりがうかがえる。またその 音色はまろやかで深みがあり、音量 も現在のグランドピアノ並みの迫力

がある。製造番号は「2268」と記さ れているが、これだけでは製造年代 の特定は難しい。調査に同行された 調律師 笠井作造氏は、昭和初期のピ アノであろうと判断しておられる。

二台目は市内西区にお住まいの北 川佳子氏ご所蔵のピアノである。北 川家の李ピアノは昭和四、五年頃購 入されたという。ピアノの製造番号 は「2536」で、ふたの内側と内部の 鉄骨に「T.A.LEE-PIANO」と記さ れている。商標の形は萩原家のピア ノと同じだが(図6)、地の布地が 前者が黒であるのに対し赤となっ ている。部品については五年前にア レールや象牙の鍵盤は元のままであ る。北川家でもこのピアノを大変大 切にされ、戦時中には専用の木箱を つくり、家族とともに愛知県鈴鹿市 に疎開させた。そのため、空襲を免 れて現存しているのである。

もう一台は市内青葉区在住の毛利 トモ子氏ご所蔵のピアノである。ピ トモ子氏を入手されたのは昭和十二年のことである。

毛利氏のご実 家は南区堀ノ 内の宝生寺 で、道を隔て た向かいが李 ピアノ製作所 であった。そ のため李一家 と交流があ

る。調律には

ある(図5)。このピアノは、今 から四十年ほど前、元町のピアノ店 (大塚ピアノ)で、萩原氏のご母 堂が音色の美しさにひかれてもとめ られたものである。ピアノのふたを 開けると「T.A.LEE-PIANO」とし るされている。ケース上部をはずす と、内部の鉄骨の部分に、二つのハ ードをかたどつた「T.A.LEE TRADE MARK」の商標と「T.A.LEE」の 刻印が押されている。セントヘンマー・ レールには「LEXOW Berlin」のマー クがついており、当時の李ピアノは ドイツから輸入した部品を使用して いたことがわかる。萩原家では除湿 装置をピアノにとりつけていたため、 保存状態が良く、調律ピン、弦、ア クション、ハンマーなどすべての部 品が元のままであった。ケースは、

櫻の板に黒の漆をぬつたもので、年 月を経ても板のそりがなく、板材を 十分に乾燥させるなど、当時の丁寧 な仕事ぶりがうかがえる。またその 音色はまろやかで深みがあり、音量 も現在のグランドピアノ並みの迫力

がある。製造番号は「2268」と記さ れているが、これだけでは製造年代 の特定は難しい。調査に同行された 調律師 笠井作造氏は、昭和初期のピ アノであろうと判断しておられる。

二台目は市内西区にお住まいの北 川佳子氏ご所蔵のピアノである。北 川家の李ピアノは昭和四、五年頃購 入されたという。ピアノの製造番号 は「2536」で、ふたの内側と内部の 鉄骨に「T.A.LEE-PIANO」と記さ れている。商標の形は萩原家のピア ノと同じだが(図6)、地の布地が 前者が黒であるのに対し赤となっ ている。部品については五年前にア レールや象牙の鍵盤は元のままであ る。北川家でもこのピアノを大変大 切にされ、戦時中には専用の木箱を つくり、家族とともに愛知県鈴鹿市 に疎開させた。そのため、空襲を免 れて現存しているのである。

もう一台は市内青葉区在住の毛利 トモ子氏ご所蔵のピアノである。ピ トモ子氏を入手されたのは昭和十二年のことである。

毛利氏のご実 家は南区堀ノ 内の宝生寺 で、道を隔て た向かいが李 ピアノ製作所 であった。そ のため李一家 と交流があ

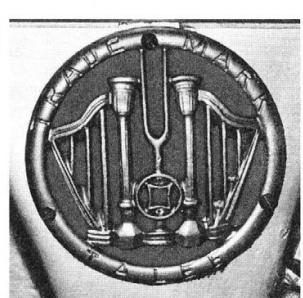


図6 李ピアノの商標  
(北川佳子氏所蔵李ピアノ)

李佐衡・李民華の親子が訪れた。 毛利家のピアノはケース上部に飾 り彫りがほどこされた美しいピアノ である(図7)。ふたの内側と鉄骨 に刻印された「T.A.LEE-PIANO」 と商標は上記二台とほぼ同じである。 二台目は市内西区にお住まいの北 川佳子氏ご所蔵のピアノである。北 川家の李ピアノは昭和四、五年頃購 入されたという。ピアノの製造番号 は「2536」で、ふたの内側と内部の 鉄骨に「T.A.LEE-PIANO」と記さ れている。商標の形は萩原家のピア ノと同じだが(図6)、地の布地が 前者が黒であるのに対し赤となっ ている。部品については五年前にア レールや象牙の鍵盤は元のままであ る。北川家でもこのピアノを大変大 切にされ、戦時中には専用の木箱を つくり、家族とともに愛知県鈴鹿市 に疎開させた。そのため、空襲を免 れて現存しているのである。

もう一台は市内青葉区在住の毛利 トモ子氏ご所蔵のピアノである。ピ トモ子氏を入手されたのは昭和十二年のことである。

毛利氏のご実 家は南区堀ノ 内の宝生寺 で、道を隔て た向かいが李 ピアノ製作所 であった。そ のため李一家 と交流があ

り、調律には 刺繡したピアノカバーなども残って いる。

こうしたピアノを製造した李佐衡 は前述の通り、昭和二〇年、空襲に 遭つて帰国した。そして一九五四年 七月八日、享年七〇歳で故郷の地で 永眠。しかし明治の末年に横浜を訪 れ、ピアノをつくり続けた李佐衡の 技術とそのピアノの音色は、確かに 現在に伝えられている。本稿執筆に あたり、これまでお名前を紹介した 方々のほか、朝倉和子、浅見啓明の 両氏にお世話をなりました。記して

# 洋書あれこれ

当館には、ブルーム・コレクション、ブラウン・コレクションといふ日本関係洋書の二大コレクションがあり、閲覧や展示に広く利用されている。実際、これらのコレクションをめざして閲覧室を訪れる利用者も少なくない。

そのほか岩生成一文庫、豊田文庫（日本英学史学会から寄託されている）、豊田博士記念文庫（豊田博士）にも洋書があるし、五味亀太郎文庫（岡コレクション）にも若干の洋書がある（前者はカード目録、後二者は冊子目録で検索できる）。

最近、それに加えて相原文庫と一般洋書の整理が進み、カード目録で検索、閲覧できるようになつた。

## 相原良一文庫

相原文庫は横浜市立大学名誉教授であった故・相原良一氏（一九〇七—一九八四年）の旧蔵書で、約四七〇タイトル（約七五〇冊）の文庫である。そのうち約三〇〇タイトル（約五二〇冊）が洋書で、その九割程度の整理を終えることができた。

相原氏は横浜市中区元町に生まれ、横浜で育った生粋の横浜人。横浜市立大学で長く教鞭をとられた。専門は日欧交渉史で、斯界の権威・岡本良知に師事して、横浜市立大学の図書の充実にも尽力されたという。その間に自らも史料を収集して研究をすすめられた。当館の架蔵に帰した旧蔵書はほぼすべてその関係の文献である。書き込みがあつたり、メモ

類が挿まれていた手稿本が多く、丹

念な研究ぶりがしのばれる。

氏の没後に刊行された論文集『日欧交渉史考——マルコ・ボーロから平戸商館まで』（南雲堂、一九八六年刊）からもうかがえるように、相

原文庫には、大航海時代の航海記、イギリス東インド会社やオランダ東

インド会社の記録、ヨーロッパの世界図に関する文献などが集められ、

英語、ポルトガル語、オランダ語などの書籍がならんでいる。岩生成一文庫（おもに日本語図書）とあわせ、当館の開国期以前の日欧交渉史の文献は一段と充実した。

## 一般洋書

当館では、もともと個人（家）所

蔵であった文書やコレクションは、なるべくそのままのかたまりで残すことを原則としている。洋書の場合も同様で、上記のようにさまざま

文庫がある。

そうした特別コレクションに属さない洋書は、便宜的に「一般洋書」と呼んでいるが、それらはおもに、

①当館が創設される以前に、横浜市史編集室で収集され、当館に移管されたもの、②個人・機関から寄贈をうけた個々の書籍、③購入した古書・新刊書の三種類から成る。

これら一般洋書、とくに新規購入本は、既存コレクションを充実させていくことが基本であり、予算もふんだんにあるわけではないので、数量的には多くはない。現在およそ八

冊ほど（約四〇〇タイトル、九〇〇冊）が整理され、カード目録で検索できるようになった。未整理のもの、新たに収集したものも、順次整理をすすめている。

## チエンバレンとライマン

一般洋書といつても、個人文庫やコレクションに属していないと

いうだけのことであって、大部分は日本関係洋書といわれる類のものである。貴重書や限定本もあり、展示

などで紹介した本もある。また貴重書とまではいかなくても、ちょっとと

した特徴のある本もある。そのなかからふたつほど紹介しよう。

B・H・チエンバレンの『文字の考文獻』にこの本をあげている。

当館所蔵本は、チエンバレンの自筆書簡が表紙裏に貼付されているの『日本事物誌』のWritingの項の参考文獻にこの本をあげている。

当館所蔵本は、チエンバレンの自筆箋が使われ、一九〇五年四月一日、チエンバレン自身も自署

が注目される。箱根の富士屋ホテルの便箋が使われ、一九〇五年四月一

六日、シユヴァルツ氏宛の書簡であ

る。ベッテルハイムを派遣した英國

海軍伝道協会についての問い合わせ

に回答したもので、今住んでいる横

浜のユナイテッド・クラブで手紙を

受け取ったが、蔵書のある箱根に来るまで返事を控えていたと記してい

る。シユヴァルツは、メソジスト監督派教会派遣のアメリカ人宣教師で、

青山学院で教えたハーバート・W・シユヴァルツであろう。

なお、チエンバレンの書簡は多数残存しており、国内では愛知教育大学付属図書館のチエンバレン・杉浦文庫が著名。当館のブルーム・コレクションのチエンバレン関係資料に

もうひとつは、E・H・ハウゼン著『薩英戦争』The Kagoshima Affairである。この本 자체もなかなか興味深い背景の本であるが、ここでは、明治のお雇い外国人ベンジャミン・スミス・ライマン旧蔵であつたことに話をしぶる。ライマン没後の一九二一年、その蔵書（和漢書・洋書）は生まれ故郷のマサチューセッツ州ノーサンプトンのフォーブス図書館に寄贈され、ライマン文庫となつた。ライマンの特徴は、本を入手したとき、必ず名前・年月日・場所を記したことだという（副見恭子「ライマン文庫のこと」、『朝日新聞』昭和五六年二月二二日）。当館の本も「江戸、一八七六年五月二三日」と記され、署名がある。ただし、ライマン文庫のこと、『朝日新聞』昭和五六年二月二二日。当館の本も「江戸、一八七六年五月二三日」と記され、署名がある。ただし、ライマン文庫からの廃棄の印があり、今でも古書目録などでライマン旧蔵という付記のある本を時々みかけることがある。アメリカではコレクションの再構築のため、蔵書の整理・廃棄をすることがある。ライマン文庫には、ライマンの個人文書もあつたはずであるが、蔵書は処分されてしまったのである。

（伊藤久子）

## 閲覧室から

当館閲覧室には、現在日本語新聞、

外国语新聞合せて一二〇タイトル、四〇七五冊の複製（当館で作成したもの）及び復刻版が開架書架にあります。日本語新聞は、横浜で発行された新聞の複製のほか中央で発行された新聞の地方版を集めたもの、関東大震災時に各地で発行された新聞を集めたもの、中央で発行された新聞の複刻版が有ります。外国语新聞はほとんどが横浜の外国人居留地で発行されたものの複製です。

今回から三回にわたって、そのなかで昨年度複製したものについて紹介したいと思います。

●「**ワイークリー・ボックス・オブ・キュリオス**」(The Weekly Box of Curios)

アメリカ人エドガー・V・ソーンが横浜の外国人居留地で発行した新聞。初めは小さな広告紙で、のちに週刊の新聞に発展したと言われている。原紙は初期のものについては発見されておらず、週刊になってからもほとんど見つかっていない。創刊年月日も不明だが、一八八九（明治二二）年一二月には月刊で発行されたようだ。週刊になったのは、一八九一年かその翌年だったと思われる。詳細は、伊藤久子「E・V・ソーン居留地の印刷出版会社経営者」（『よこはま人物伝—歴史を彩った五〇人』神奈川新聞社、一九九五年）を参照されたい。

日本近代漫画の祖といわれる北沢楽天は、本紙でデビューした。彼は、

オーストラリア出身の画家でのちにニューヨークに渡って『バック』誌で活躍したF・A・ナンケベルの影響を受けたと語っている。

埼玉県大宮市には楽天の遺産をはじめ関連資料を保存公開するため、彼の旧居跡に建設された大宮市立漫画会館がある。その収蔵資料の中に樂天旧蔵の本紙があり、複製で収集することができた。一九〇八（明治四二）年二月から一〇月のもので、同年版の外国人人名録によれば、アーティスト・植字工・印刷工・製本工合わせて百人を数える大きな印刷・出版会社に成長した頃発行されたことがわかる。残念ながら樂天が同社にいた時期より後であり、全員揃つた完全なものではない。しかし、これで知られている全ての本紙を閲覧室で見ることができるようになった。

初期には滑稽と風刺を主体とする広告紙だったとされるが、週刊になってからも広告が多く、一頁全体を使って風刺だけでなく、お花見の様子など風俗を描いたものもある。当館では、次の複製を作成した。

一九〇一年三月一六日（羽島知之氏蔵）、一九〇八年一月八日・三月七日・同二日・四月一日・五月二三日・七月四日・一〇月一〇日そのほか年月日不詳のもの（大宮市立漫画会館蔵）、一九一四年二月七日・同二八日から一二月二二日・一九一五年二月六日・同二〇日・三月二〇日・五月一五日から同二二日・八月二八日（当館蔵）。

（上田由美）

## ▼展示

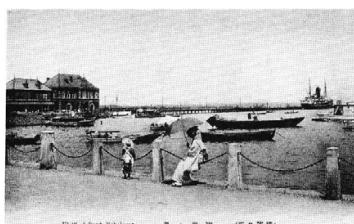
(1)「大正期の横浜—民衆の時代」8/6㈬～10/26㈰ 明治期からの都市基盤整備がいちおうの完成をみ、近代都市として生まれ変わった横浜は、第一次大戦の好況のなかで、都市としても輝かしい時代を迎えた。その一方で、大正9年の恐慌と関東大震災の打撃により、多くの人々が苦しい生活を余儀なくされました。展示はこうした大正期に生きた横浜の人々の姿を多角的に紹介するものです。

(2)「横浜の外国商館」(仮称) 10/29㈬～2/1㈰ 幕末から明治期を通して、横浜港貿易に大きな力を持っていた外国商社について、さまざまな資料により、経営者や活動の実際、日本人商人との関係を紹介します。

## ▼寄贈資料

- (1) 養老貯蓄銀行保土ヶ谷支店前行員集合写真ほか 14点（青葉区藤が丘 細淵淳氏）
- (2) 駒田常三郎関係書簡・葉書 明治30年代ほか 210点（神奈川区中丸 濱野泰光氏）
- (3) 日本生糸輸入組合資料ほか 783点（東京都千代田区有楽町 日本生糸輸入組合）
- (4) 紬布絵（広重画 花鳥図・複製） 4点（南区真金町 滝口和子氏）
- (5) 台湾紹介最新写真集（昭和6年 台北市・勝山写真館）ほか 5点（南区南太田

## 資料館より



▲オリジナル・レフロンカード 明治後期・着色絵はがき「海岸の景」（大桟橋を望む）1枚800円（本体価格）当館・受付で販売

町 増田好夫氏）

- (6)『画報躍進之日本』 東洋文化協会 10点（金沢区六浦町 小泉元久氏）
- (7) 来日外国人のスクラップ・ブック（明治中期） 1点（南区大岡 大塚十三氏）
- (8) 横浜貿易新聞代価請求書ほか 8点（東京都目黒区鷺番 羽島知之氏）
- (9) 鈴木文治書軸 1点（川崎市川崎区桜本 田中経隆氏）

(10) 横浜市内風景写真（昭和20年代から30年代）フィルムほか 1310点（栄区元大橋 広瀬始親氏）

(11) 出入国管理行政発足30周年記念 法務省出入国管理局編 1点（港南区日野 大井健治氏）

## ▼新パンフレット（小・中学生用）が完成

大人用新パンフレットに引き続き、このほど小・中学生向きのパンフレットも完成しました。「まちを歩けば歴史が見える！」のテーマで、横浜ものはじめを分かりやすく紹介しています。A3変形型・4ツ折り・カラー。当館・受付で無料配布しています。



## ▼ビデオ上映会のお知らせ

当館が企画・製作したビデオを最新のビデオ・プロジェクターを使って、上映会を開催します。日時、ビデオのタイトル等について、電話045(201)2100までお問い合わせ下さい。入場は無料で、会場は当館・講堂です。